サマリートーク

大國 充彦

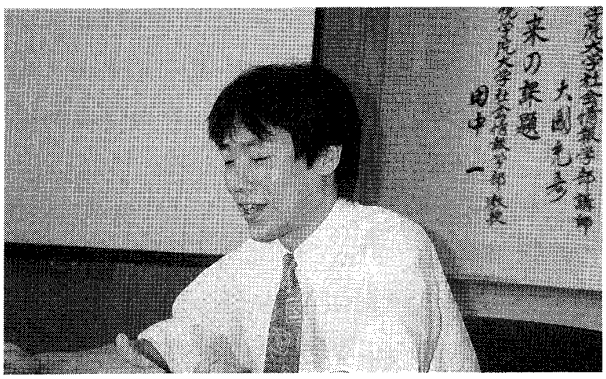
電子メディア生活の原初形態

サマリートークをさせていただきます．

私は，こちらの学部で社会学領域で人間関係論ということを考えておりまして，現実の社会の中で，人と人とのかかわりがどういう在り方をしているのかというところからいつも物事を考えております．ですから，昨日今日と，3人の先生方をはじめ討論の中でも，あまり私の馴染みのない言葉もたくさん出てまいりましたし，あるいは，今まさにはやりの，と言っては何ですけれども，情報化社会の問題というのがいくつも出てきたように思います．その中で，サマリーという形で何が言えるんだろうと考えたときに，自分の立場から何かものを言うしかないわけなので，まずタイトルをつけさせていただきました．サマリートークのタイトルに「電子メディア生活の原初形態」というタイトルをつけました．これは社会学の方の古典的な作品と言われている，エミール・デュルケムの『宗教生活の原初形態』というものの，「宗教」のところを「電子メディア」に置き換えたというそれだけの話なんですが，このタイトルをつけただけでずいぶん私は満足してしまいまして，なぜ満足してしまったのかというところをお話ししていこうと思います．

昨日の3人の先生方のお話の中でも，今の，この高度情報化社会といわれている，情報が流通するような社会の在り方というのが，いろいろな意味で今まで人間が経験したことのないような新しい領域，次元，ステップに踏

Atsuhiko OHKUNI 札幌学院大学社会情報学部



大 國 充 彦 氏

み込んでいるんだということを，どこかで背景になさりながらお話をしてくださったと思っております．

例えば，中島先生のお話の中では，今の子どもたちというのが映像の情報処理能力ということに関して，我々よりはかなり違ったものを持つ可能性を持っているというお話もございましたし，大槻先生のお話では，20年先にならないと実現しないであろうヴィジョンというものを，情報社会の将来像という形で提示していただきました．そういう形で将来像，おそらく今とは違う形のものができるだろうという，それがバラ色になるのか灰色になるのかという価値判断は置いておいて，少なくとも，今とは違うものが何か出てくるという，何らかの見込みをどこかでお持ちの上でお話しくださったように思います．濱田先生のお話の中では，そういった従来のものと新しいものとの違いが，実はもう，法律のところでは出てきてしまっているというお話をしてくださったように思います．それは，先程のお話でも出てきましたように，パソコン

通信上の名誉毀損のお話などは，従来の法体系が前提にしていた考え方では対応ができない，そういう状態が出てきている．そういうふうに，何か新しい動きというのはすでに始まっている，という形で理解しました．

その意味で，電子メディアといったものを媒介にした人と人との繋がりの生活というのは，まだ今のところは，非常に未熟な原始的なレヴェルにある．その形態に，今我々は生きているんだということで，「電子メディア生活の原初形態」というタイトルをつけたわけです．この中身を多少お話ししないとタイトルだけで終わりというわけにはいかないので，三つの話をさせていただく中で，この原初形態の一つの側面を見ていこうと思います．三つのお話をするんですけれども，三つを繋げるものとしては，私の専門である人間関係論，言葉として言えば人と人との繋がりということを一応キーにしながら，三つお話ししたいと思います．

人間は洗脳されたがる生き物だ

最初は，人間というのは洗脳されたがる生き物だという話をしようと思います．これは，タイトルは過激かもしれないですけれども，中島先生のポリオタンクであるとか，ぬるま湯の中で長時間そんなに浮いていられないという，人間は刺激がない状態に非常に弱いというお話を聞いて，それだけでそういうことが言えるのかどうかわかりませんけれども，人間は能動的に刺激を受けようと待ちかまえている存在なんだろうと思うわけです．ポリオタンクやぬるま湯の中で，刺激の自給自足ということが起きる．まず最初に，意識的に自給自足しようとする，その次には，無意識的にまで自給自足しようとするじゃないか，というお話から受けたことなんですけれども，能動的に刺激を受けようとする．つまり，刺激を受けるというのは，単にいきなり「ぱん」と与えられて受けるのではなくて，受けよう受けようと待ちかまえているところへ「さあ，きたぞ」と受けとるんだろう．そういうふうに考えるのがいいような気がするわけです．ちょっと聞いたことがある話なんですが，発達心理学の領域では，赤ちゃんというのが，生まれたままの状態は真っ白の状態で，そこにどんどん知識とかが植えつけられていくんだ，というのは，かなりそれは古い赤ちゃん像であって，最近の発達心理学の研究では，赤ちゃんというのは，まさに，刺激を受けようとする能動性を持って，積極的にはたらきかけているんだ，ということを言っている人がいます．そういうことと，人間は刺激を受けようと能動的に待ちかまえている存在なんだということをつなげてみようと思ったわけです．

そういうふうに，人間は，能動的に何か刺激を受けようとする．ということは，ある意味で，人と人との繋がりというのも実は，人間関係論の領域では，相互依存的な関係の中に人間は生きているんだという言い方をするのですが，寄り掛かり寄り掛かり，お互いに寄り掛かるわけですけれども，「寄り掛かってもいいんだよ」と言ってもいるわけですし，「寄り掛からせてね」とも言っている，そういう依存的という言葉に秘められる，隠されている，あるいは背景にある，何か受動的な側面だけではなくて，依存するということにも何らかの能動性が働いているんだ，そういう側面があると思うのです．そうした場合に，中島先生の基準のお話しで出てくる基準というのが，それがどういうものか分からないにせよ，何らかの基準というのは，やはり我々は自分から進んで受け入れてきたんだろう．その意味では，その基準で洗脳されているんだろう．だからマインドコントロールだとか洗脳だとかを言うときには，我々が，先ほどの49機が間違っているという話がありましたけれども，大多数の人も洗脳されていて，例えば特殊な人が，それも正しくはないけれ

ども，その人が何か大多数の人と違う洗脳のされ方をされてるからマインドコントロールだ，と言っているだけなのではないかと思うわけです．

そういうふうにして，人間というのは何かしら能動的に何かを受け入れようとしている．そういった形で考えたときに，人は繋がりを求めている存在なんだろう，というふうにとりあえず考えることができるだろう．繋がりの中身というのは，いろいろな形での情報交換であったり，ということがあると思うわけです．

二重のリアリティ

今度は二番目の話に入るわけですけれども，二番目の話は「二重のリアリティ」というお話で，これはバーチャル・リアリティというお話が昨日も出てまいりましたので，そのことについて若干考えてみたい．このシンポジウムが始まるときに，狩野先生が，ここにマイクはあるんだけれどもこれは記録のためだけであって，一人一人の生きのいい肉声でもって論議をしよう，というお話をしてくださいました．そこで，そういった肉声によるコミュニケーションというのと，あとバーチャル・リアリティとかパソコンのネットワークといったところで見られているような，ある種の人工的なメディアによるコミュニケーションといったものと，二つのコミュニケーションの次元がおそらく考えられるだろう．肉声によるコミュニケーションの方を身体性のリアリティに基づいた，そういった形でのコミュニケーションと考えてもいいですし，それを濱田先生が対面主義とか書面主義とかといった形で表現なさったことと何らかの繋がりのある，我々がかなり当り前と考えているような繋がり方のものだろうと思うわけです．それに対して，バーチャル・リアリティという形で言われるものは，リアリティはバーチャルなんだけれども経験はリアルなんだと，大槻先生もおっしゃってましたけれども，ある種のリアルさというのがあります．5，6年前にいとうせいこうという人が『ノーライフキング』という小説の中で，テレビゲームというか，それはパソコンゲームなんですけれども，そのゲームソフトの中で遊ぶ子どもたちが，まさにゲームの世界が非常にリアリティを持って自分の中に迫ってくる．それをもって，「新しいリアルだ」というセリフを言わせている小説なんですけれども，そういった電子メディア等によるコミュニケーション，あるいはそういったパソコンゲームの世界というのも，単に非現実的だということだけでは済まされないような状態になっている．その意味で我々は，あるいは我々の電子メディア生活というものは「二重のリアリティ」，「二重の生活空間」といったものをリアルなものとして捉えていかなければならないような，そういう歴史的な時代になっていくのかなと思うわけです．もちろん，この「二重の生活空間」，「二重のリアリティ」というのが全く別個に存在しているわけではなくて，それは現実の世界に，もちろん繋がりを持っているわけですが，ただこの二つの生活空間が持っている意味合いというのを考えた時に，何か少し面白いことが考えられるかなと思っているわけです．

バーチャル・リアリティの問題の中で，例えば，大槻先生がおっしゃってました第四世代の，かなり先の，将来の話では認知の混乱という問題が起きてくる．それは脱コンテクストということが起きて，時間的なあるいは空間的な脈絡から自由に編集が可能なんだということをおっしゃってました．また実際にインターネットなどを見てみると，ある種国境のない空間，ボーダレスな空間というのが形成されている．その意味では，非常に時間的空間的なものから解放されてくるという側面を持っているわけです．これに対して先ほどの「身体性のリアリティ」といったものは，

確実にこの空間，今ここでという形の時間的な拘束であるとか空間的な制限であるとかというものを必ず持ってくる．そういった空間の対比といったものがあるわけなんですけれども，その中で二つの，二重の生活空間と言ったときに考えなければいけないことの一つは，人間関係論とかあるいは共同性の問題というのを扱っている人の中では，共同性がもっている，自分の存在を保障してくるという側面と，自分の存在を拘束してくるという，二重の共同性の問題というのがよく言われているわけです．それは「身体性のリアリティ」の生活空間において言われていたことで，歴史的に伝統があって，自分の親しみのある空間にいることが，自分を安心させてくれるという，存在の確からしさを保障してくれる側面と，でもそれが拘束となって，そこからなかなか動けなかったり，それにとらわれたりしてしまうという側面とを持っているわけです．ところが，ボーダレスなバーチャルな方の生活空間においては，そういった時間とか空間からの解放ということがまさに前提になっている．そういった解放が前提になっている空間と，実は拘束という形で持たざるをえないような空間というのが，一人の人間のところに二重に提示されてくるという可能性はあるのかと思ったわけです．ただ，時間空間からの解放というのは，逆から捉えれば，根無し草的なものになってしまうんだということもあるわけです．

こういう形で「二重のリアリティ」を考えて，人間が持ってくる感覚の統合の在り方みたいなものが，今とは違ってくるという可能性はきっとあるんだろうなと思うわけです．もちろん，それがいいものになるのか悪いものになるのかという評価とは別の問題で，今とは変わってくるだろうというふうに思います．

「ゲリラ的な繋がり」

「二重のリアリティ」の問題が今までの話で，最後の三番目の話がいわば「原初形態」という中で出てくる新しさのお話になるわけです．先ほどお話しましたデュルケムの場合，宗教現象に伴って，当時の人々あるいはそういった原初形態の宗教生活を営んでいる人たちが感じていた宗教的な力を「マナ」と呼んでいたんですが，我々のこの現在の電子メディア生活の原初形態において「マナ」に当たるもの，何か力を感じるものというのはなんだろうと思って聞いていたというか考えていたら，議論の中でもそうですし，3人の先生方のお話の中でもそうでしたけれども，創造力，クリエイティビティというのがかなり頻繁に使われている．何か新しいものが生み出されるのではないか，そういった何かの力というものを，おそらく感じていらっしゃるからこそ，そういった言葉を使っていらっしゃるんだろうと思うわけです．何か新しいものを生み出してくるというところに可能性を見い出すのは誰でもするわけですが，ちょっと立ち止まって考えたときに，何か新しいものの力を感じることの，その背景には現状に対する批判であるとか不満であるとかといったものも，本当はあるのではないだろうかとも思うわけです．

電子メディアを論じている社会学者の中で，例えばコンピュータにはまりきっているいわゆるオタクと言われているような人たちのことを見ていった研究の中で，オタクと言われる人たちというのは，かなり多くが終末というものを非常に期待している．このあいだのオウム真理教のときでも，ハルマゲドンという形で最終戦争がどうのこうの，要するに今が終わればいいという発想をどこかで持っているわけです．それは逆に言えば，あまりに終わりのないだらだらと続いている今の社会に対するやっぱり何らかの反発なんだろう．それと全く同じ，終末への予感とか期

待の雰囲気と同じ水脈に位置するものとして，研究者の創造力，何か新しいものへの期待というのがもしかしたら考えられちゃうかもしれない．ハルマゲドンの学問的な表現として創造力というものがある．もしかしたらあるのかもしれないと思ったわけです．

何か新しいもの，何か今までとは違う力を感じてしまうといったところにあるものはいったい何かな，と最後に言って終わろうと思うんです．パソコン通信のネットワークの上で，ある種の無政府状態というのが起きているんだ，というのを田中先生がご指摘なさって，濱田先生がネットワーク上では情報の管理というのはほとんど不可能なんだ，まさに情報がすさまじい勢いで噴出してきている，というようなお話をしていただいたと思いますし，中島先生の方からは，総合学や人間科学部や社会情報学部といったようなものが持ってくる，得体の知れなさというようなお話をお聞きしたわけです．そういった，何か得体の知れなさとか何かすさまじい力というのは，どういうものから出てくるのかなというと，一つには，人と人との繋がりがゲリラ的になっている，ということなのかなと思ったわけです．これは濱田先生が，ゲリラ的に流される情報は法的には規制できないんだ，というお話からもらった，ゲリラ的という言葉なんですけれども，つまり，あらゆる人間の今までの組織とか集団というのは考えられる限りの，目的はもちろんあるわけですが，その目的に応じたあらゆることに対処できるように，軍隊的な言い方をするのもあれなんですけれども，いわば正規軍的に編成されている．そういう形で陣容を整えて「さあ，問題こい」と待ちかまえているわけなんです．実際には，今の高度情報化社会でいろんな問題が起きてくる．そういったものに対しては，正規軍を率いていくのは非常に重たいわけで，そうではなくて，現にある問題に今ある兵力で対応する，できるだけ対応する，できないかもしれないんですけれども，とにかくやってみる．そういうスタイルの，人と人との繋がり方というのがありうるのではないかと思うわけです．実際に具体的にはどういった在り方があるんだといったときに，金子郁容さんとかが言ってらっしゃるボランティアという形が，そういったネットワークを持っているんだろう．ボランティア的なものが持っている，ある種のゲリラ的な繋がり方というのが，この新しい生活スタイルの中で，何らかの一つの意味を持ってくるのではないかと考えます．

「電子メディア生活の原初形態」ということで，ゲリラ的な人と人との繋がり方というのが，何か新しい意味を持ってくるような気がするというお話をさせていただきました．もちろん，このゲリラ的な繋がり方の裏側には，社会情報学とか社会情報学部という組織原理の問題というのも，実は射程に入りうるかなとも思って，こういうお話をさせていただきました．以上で終わらせていただきます．